

## 女子部中等科 2 年 地理 「オーストラリアについて」

橋本 真人

オセアニア州においてオーストラリアは大きな存在感を示している。世界第 6 位を誇る国土面積に加え、オセアニア州の中での人口の多さ、GDP の総額、国際観光客数など多くの点で群を抜いている。また、貿易や観光を通じて、日本を始めとするアジア州の国々との関係が深まってきている。今回、この国の地理的事象を自然地理・人文地理の両方の見地から多角的に捉え、発表内容を構成した。

### I. はじめに

女子部中等科の地理教育は、1 学年から 2 学年にかけて 2 年間でその学びを実施する。とくに 1 学年の 2 学期から 2 学年の 2 学期にかけては世界の諸地域について地誌学の視点に立って学習が展開される。東アジア州から始まり、東南アジア州、南アジア州、西・中央アジア州、アフリカ州、ヨーロッパ州、北アメリカ州、南アメリカ州、そして最後にオセアニア州について学ぶことで世界への知見を深めていく。そのため、オセアニア州は世界地誌学習の締めくくりという位置づけになる。そのことに留意し、学習を展開することが重要である。以上のことから、今回は世界地誌学習のまとめとして「オーストラリアについて」を題材に報告会を行った。

### II. 報告会までの学習と報告準備

報告会の進め方として、家族ごとに取り組むことを想定して授業を構成した。後期の家族替えは 10 月中旬であるため、本格的な準備はそれ以降となった。

9 月末の報告会に向けた最初の授業で「オーストラリアの地理を学ぶ際の着眼点はどのようなものがあるか」と生徒に尋ねた。地誌学習を締めくくる単元でありこれまでの地誌学習の積み重ねがあるので「地形」、「気候」、「経済」、「文化」、「産業」などたくさんの着眼点を挙げる事ができた。そこで挙がった項目を 1 人 1 つ選択し、まずは各自で調べ学習を開始した。主体的な学びを期待したため、興味のあるテーマを自ら決めることとした。体操会の忙しい合間を縫って調べ学習を進め、クラス内での発表会を行った。テーマはそれぞれであったが、皆の発表に耳を傾けることで多角的な視点からオーストラリアを知る機会となった。

10 月中旬になり、家族替えが終わり、準備が本格化した。女子部に入学して初めての報告会ということもあり、具体的なイメージを持ってもらうために過去の報告会の映像を視聴した。それをすることで、クラスの取り組みとして「自分たちが理解し、工夫して伝える」ことを目標として定め、ステージ上の人や表の配置についても自分たちの中から案を出すことができた。発表内容を決める際には、9 月末の調べ学習で扱ったテーマを「歴史」、「気候・地形」、「動物・植物」、「経済・産業」、「人種・民族」、「日本とのつながり」の 6 つに再編し、これを家族ごとに選んでもらった。希望が重なっても、最終的には譲り合って決めることができた。

11 月上旬には発表内容を吟味する段階に入った。中間発表を経て、各家族の発表順番を話し合った。互いの発表内容が理解できていなければ難しい作業であったが、「あの家族よりも後で報告した方が、つながりが良い」、「最後は日本とのつながりで締めくくったら良いのではないか」など意見を出し合う様子が見られ、自分たちの発表を自分たちで作ろうとする姿勢を頼もしく感じた。順番が決まると、報告文の内容にも多少なりとも影響があり、手直しが始まった。報告文の吟味を促進するため、早稲田大学法学部教授の澤田敬司先生をお招きしてご講演いただいた。オーストラリア映画から見た「歴史」、「気候・地形」、「動物・植物」などを。このお話を伺って、発表原稿を手直しする生徒が増え、簡単に準備を終わらせず良い発表を作ろうとする姿勢は大変心強いものであった。



11月7日 中間発表の様子



11月10日 表書きの様子



11月14日 澤田敬司先生によるご講演



11月15日 ステージ発表の練習の様子

### Ⅲ. 報告の内容

#### B家族「歴史」

最初にオーストラリアの位置を日本との対比の中で説明した。歴史については大陸における人類の始まりから現代まで概観した。他の家族の報告に関わる歴史的な出来事に触れることで、その後の話の道筋をつくる役割を担った。

#### A家族「気候・地形」

1644年に大陸北西部に上陸したアベル・タスマンは領有を宣言しなかった。一方1770年に大陸東部に上陸したジェームズ・クックはイギリス領としてその領有を宣言した。これを大陸北西部が乾燥帯、東部が温帯という気候の違いによって説明した。また、珊瑚礁やアボリジニの聖地であるウルルなど、観光資源としても有名なそれらの地形の成因や特徴にも言及した。

#### F家族「動物・植物」

オーストラリアと言えば袋類が有名であるが、その歴史を辿ることで他の地域で現存しない理由について明らかにした。他にも単孔類や走鳥類など地域固有の動物、そして乾燥帯で見られるバオバブの木など多様な動植物が見られることを報告した。

#### E家族「経済・産業」

農業や工業が盛んなこの国の経済・産業については、歴史的観点から概観した。ゴールドラッシュから始まる鉱工業の興りに触れ、白豪主義政策の実施から多文化主義への移行について説明した。また、ウルルが観光資源になっていることについて問題提起し、その現状を報告した。

#### D家族「人種・民族」

オーストラロイドという人種が多く住み、またアボリジニという民族がいることが主な報告内容であった。とくにアボリジニの特徴に触れ、これまでの人種差別政策と現在の保護政策を取り上げた。

#### C家族「日本とのつながり」

日本とは真珠産業や貿易などで関わりがあったが、第二次世界大戦で敵対したことや捕鯨問題があるため、関

係が複雑であることを説明した。

#### IV. 終わりに

現行の学習指導要領は全体としては教育内容中心となっている。奈須(2017)によると、より効果的な教育課程への改善を目指すためには、学習指導要領の構造を、育成すべき資質・能力を起点として改めて見直し改善を図ることが必要とされている。しかし、内容に加えて資質・能力も育てると発想すると、教えるものが増え、とても時間が足りないように感じられる。そのため、ここで重要となるのは初期の段階でじっくりと時間をかけて資質・能力を育成することである。そうすることで思考力や意欲が高まり、内容の習得が促進される。そして新たな内容を学ぶ過程で資質・能力も高まり、次の内容の習得に活かされるという好循環が期待されている。つまり、資質・能力と内容は相互依存的であり、また相互促進的な関係と考えられている。

上記のように、今後の教育では若い学年のうちに資質・能力を育成することが基礎となり学びが進んでいくと考えられる。そのことを踏まえ、中等科2年という時期だからこそ地誌学習のための「資質・能力の育成」を意識し、授業の組み立てを行った。1学年の2学期から地誌学習を積み重ねてきており、基本的なものの見方は備わってきている。そのため一段抽象度を上げて概念化することで「資質・能力の育成」を目指した。この具体的な取り組みとして「オーストラリアの地理を学ぶ際の着眼点はどのようなものがあるか」という発問によって「地形」、「気候」、「経済」、「文化」、「産業」などを列挙する学習が挙げられる。「何を知るか」ではなく、「どのように学ぶか」を問うことで生徒の学習能力がさらに磨かれることと思う。また、今回広い視野で地域を見ていく中で、点と点になっている知識がつながって線になることに気付ける生徒がいた。例えば、「オーストラリアは乾燥した大陸である」という気候視点での学びが「オーストラリア大陸を発見したものの、不毛な土地であったため領有宣言しなかった」という歴史視点での学びと繋がるということがある。別の事象として見ていたものを関連づけ、結び付けて考えることが、一人ひとりの学びを深めることに繋がっていた。

このクラスは主体的に報告の準備ができるクラスであった。発表練習をした後の反省会では教師が取りまと

めるのではなく、リーダーが先頭に立って、自分たちで自分たちの報告の改善点を言い合うことができていた。互いに声を掛け合い、協力して1つのものを作り上げることの良さを生徒たちが学んでくれたならば幸いである。

最後に、この取り組みを行うにあたってご尽力いただいた多くの方々と生徒の努力に感謝したい。

#### V. 主要参考文献

- 奈須正裕(2017):『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社  
山本隆太ほか(2017):地理学習におけるシステム思考を導入したESD 授業実践. 教育と研究 35, 57-78